

先生
おじやま
します

アカデミックな活動に必要な読書技術を指導

グローバル・コミュニケーション学部日本語コース

脇田 里子 准教授



わきた・りこ 1966年生まれ。九州大学文学部卒業後、大阪外国語大学大学院外国語研究科修士課程および大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程修了。博士(言語文化学)。福井大学教育地域科学部助教授および同大学留学生センター助教授、本学日本語・日本文化教育センター専任講師・准教授などを経て2011年4月より現職。(※組織の名称は当時のものも含む)

外国人留学生を対象に、日本語・日本文化に習熟した人材の育成を目標とするグローバル・コミュニケーション学部の日本語コース。脇田里子准教授は同コースで、レポートや論文の作成などアカデミックな活動に必要なとされる読書技術を教えています。日本語教育、アカデミック・ライティング教育が准教授の専門です。

協同学習LTDを取り入れる

「ただ読むだけでは、知識を身に付けることはできません。本から得られた情報を自分のものとして確実に吸収し、かつ

『外』に向けて発信することを前提とした読書技術をマスターしてほしい」と考える脇田准教授。そのために、担当する日本語のリーディングの講義では「ラーニング・スルー・ディスカッション(Learning Through Discussion:LTD)」と呼ばれる協同学習を取り入れています。受講する学生は、事前に本の所定の箇所を読んだ上で、脇田准教授が用意した内容理解問題で本文のポイントを把握。これに加えて学生が印象に残ったところを引用し、また筆者の主張や自分の意見などを読書シートに記入します。一方、講義では、予習した内容を

もとに、ピア(仲間)とディスカッションを行います。また、1冊読み終わるごとに読書シートやディスカッションの内容をまとめた1000字程度の書評と、大学生協書籍部で行われている「読書マラソン」に提出するための200字程度の短い書評を作成し、クラス内で閲覧します。

半期に3冊ずつ読んでいきますが、うち2冊は脇田准教授が指定し、残り1冊は指定する新書の中から学生が自分で決めます。「本選びに関しては、出版年が新しく、かつ日本語や日本文化など、学生の関心に即したテーマの本を指定するようにしています」と准教授は話します。また、難しい言葉が出てきても、辞書機能を使って意味を調べることができるので、Kindle版で入手可能な本にしています。

「日本語で思考する力、身に付く」と

当初は縦書きの本に戸惑う留学生が多いといいます。また、読書習慣のない留

学生の場合は、重要な個所に線を引いたり、付箋を貼ったりする作業に慣れていないこともあるのだそうです。しかし、上記の課題をこなすことで、読書技術はもちろん、情報発信のスキルも確実に上がり、文献の引用の仕方や、自分の考え方の述べ方などがわかるようになっていく、と説明します。

外国人留学生を指導する傍ら、同志社の教職員合唱団「アンサンブル・クローバー」に所属。2020～2021年度はコロナ禍のため、活動は休止になりましたが、「例年、週1回の練習を続け、年に2～3回ほどチャペルアワーで讃美歌を披露している」という脇田准教授。自らの教育実践を踏まえて「日本語で読む力を付けることで、日本語で思考する力も身に付く」と強調します。高度な日本語運用能力を備えた人材が育ちつつあることを実感しました。